

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

元 年 11 月 号 (208号)
元 返 葉 大 (合 計)
1644
2604
(468名)

元 年 11 月 号 (208号)
元 返 葉 大 (合 計)
1644
2604
(468名)

二つの大会を終えて

会長 根岸岳萃

九月十七日の記念大会も、県本部傘下各会の絶大な協力により盛会裡に終り、私自身今度程疲れたことはなかった。又十月八日の全国大会も石川県の吟友のご活躍により滞りなく終了した。どちらも大会運営の責任者の一人として誠に感謝に堪えません。振り返って県大会の場合、結果はともあれ、合吟コンクール十四組のうち、二組も碩心会から出場していただき、構成吟にして、詩舞六組中、三組が当会で、又伴吟者あり、仲々立派でした。大合吟も三組出吟と、碩心会の占めたウエイトは誠に大なるものでした。

又十月八日の全国大会に、県本部から参加された百六十名中、当会の二十五名は他会を圧倒していました。総本部理事の中で自分の会から一人も出吟されていない人が多くいられることを思うと、私の幸福感は大きい。地方大会に碩心会から多数出吟されることは理事長として松井先生も大変喜んでいられると思っていました。自分が理事になって本當にうれしさを痛感しています。

又今回は宇都宮徳風さんのご努力で、石川県知事が多忙中臨席されたことは、まさに特筆すべき快挙でしょう。又参加された方々も、地方大会を通して、地方地方の吟法、詩舞の流れ等、吟道に対し、プラス面をお取りになったことと思っています。

この二つの大会を振り返り、碩心会の皆さんの活躍は、他会の羨望するところです。この輪をもっと大きくして、会の発展に結びつけたいものと思っています。

今年から会長の独断で、年間三名以上会員を紹介された方に、総務部に協力願って「吟道普及賞」を作り、初吟会の折、表彰したいと思っています。皆さんの益々のご精進とご協力を切にお願い致します。

佐渡金山にて

秋落日三年の生命たつごとく

秋寒しカラクリの目と目が会いぬ

穂すすきの祈るに似たり流人墓地

汲みあげの用なき坑道水寒し

碩心会 逗子地区温習会

とき・平成元年十二月三日(日)

ところ・逗子市図書館ホール

詩吟の魅力

真澄支部 嶋津幸風

私は真澄支部村田先生にお世話になり、早くも八年になります。

日進月歩のハイテク時代を迎えた日常生活で、とかく自分を見失ないがちな中で、詩吟の練習に没頭している時が、日頃の不平不満を忘れさせてくれる唯一のひとときでございます。週一回の短時間の御指導も密度の高いものとなり、自宅での一層の練習をふるいたたせてくれます。

今回の奥伝の査定まで、毎回のようにながらりっぱなしで、日頃の練習の成果が発揮できず、不本意な結果に終る自分がなすけなく思えてなりません。その度精神的なよろさと、修練の不足を深く反省しております。

一見簡単で、単純そうに思える詩吟も、やればやるほど、奥深い不思議な魅力を感じております。

これからも先生の御指導にしたがい、詩吟を生涯の友として、楽しみながら続けてゆきたいと思っております。

第96回全国吟道大会参加

県本部吟行会

(第一日) 三方五湖と那谷寺

白井麗岳

ひかり一〇一号を名古屋で下車、碩心会(参加者26名)は、2号バスに乗り込んで九時三十分駅前を出発、途中二回休憩があって、北陸自動車道を一路敦賀へ。沿道の農村地帯は、稲の刈取りが終って処々に煙りが立ち上っていたのがよかった。でも、福井に入り、歌手五木ひろしの生家近くを通過したとき、バスガイドの説明がやや過剰であったのが気にかかった。正午過ぎて間もなく若狭湾国定公園三方五湖に到着。昼食の後、快速ジェット船で三十五分間の五湖めぐり。「若狭なる三方の海の浜清みいゆきかへらい見れどあかぬかも」の万葉集(七・一一七七)に歌われた景勝を万喫できた。

五方湖や萬葉の日の秋の色 麗岳

二時、敦賀を後に北陸路を福井に向う。途中、百米近くの大きな農家が火災を起し、黒煙を巻き上げていたのは凄まじかった。永平寺近くの沿道は、いわゆる「教居村」で、国道両側の広々した農地の中に、樹木

に囲われた農家が点在していたのが珍しかった。

越前竹人形の里を過ぎ石川県に入る。途中、国道8号線の左手に、高さ八十三米という大慈母観音像が眺望された。抱かれています子の大きさが、奈良の大仏と同じとかで驚かされた。掌は十一畳分とのこと。

十六時、高野山真言宗別格本山那谷寺に到着。一二〇年の伝統ある十一面千手観世音を拝す。北陸のこけ寺と称されるだけに、古杉が林立するなかに苔むした庭が展げ、境内のたたずまいは幽すいそのものである。奇巖の遊仙境だけでなく、唐門はじめ重要文化財指定の建造物が数多く、一時間の参観は大忙しであった。そして十七時、寺も門前の商店も一斉に閉鎖してしまつたのにはまったく驚かされた。

山中温泉到着時は、もう暗かった。

(第二日) 大会盛会に終る

宇都宮徳風

8時ホテル「大黒」をバス四台に分乗して出発。北陸自動車道を東進して9時30分大会々場石川厚生年金会館ホールに到着。途中、小松空港、安宅の関跡、加賀の千代女の松任市を通ったが、烈しい雨が、バスの窓に打ちつけて景色は見えず、ガイドの

案内を聞くだけだった。

定刻10時、修礼にはじまり、国歌斉唱、大会事業部長明岳先生の簡明なる開会の辞があり、次に前年コンクール優勝の青龍吟道会から優勝杯が返還された。続いて全員による「朗詠」の大合吟が根岸岳奉実行副委員長の先導で行われ、吟声がホールに満ち満ちた。次いで、理事長長竹未岳陽先生の明治天皇御製「あさみどり」が謹詠され修礼を終えた。

これから第一部「一般吟詠」に入り、独吟、合吟39番が熱吟され、次に会旗入場となり、全員拍手の中、総本部旗以下43団体の会旗が堂々と入場した。

次いで式典に入り、大会実行委員長高桑岳松先生、大会々長竹未理事長の挨拶があり、続いて来賓祝辞として知事代理の先生の祝辞、市長代理の方の祝詞代読があり式典を終り昼食休憩となる。

12時30分第二部「一般吟詠」に入り、この中に神奈川県本部女性の「富士山」の合吟があり多くの拍手を呼んだ。次に今大会のメインイベントの合吟コンクールに入り、男6組女12組が五題の課題吟を練習の成果を精一杯発揮熱吟、審査の結果を待つ。

会旗退場のあと第三部に入り「北陸の四季」と題する構成吟が、石川吟詠会、北陸

岳水会、詩舞の渋川流、剣月流の皆さんによる、詩舞、スライド、伴奏が一体となった見事さが深い感動を与え、満場の拍手をあげた。そのあと第二部の合吟は100名を超える大合吟が多く圧巻であった。この中に県本部男性二組が共に「神州」を合吟した。大切りに役員吟詠に入り、総本部役員吟で吟詠をすべて終了した。

次に合吟コンクールの講評と待望の入賞発表が左記の通り決定、万場の拍手の中、賞状と賞杯が授与された。

優勝・432点 出塞行 北陸岳水会（女性）
二位・431点 出塞行 新大阪岳風会（男性）
三位・429点 静夜思 三重岳仁会（男性）

最後に大会副会長長谷川岳聖先生により閉会の辞、佐藤岳養先生の発声にて、万才三唱、大会の幕を閉じた。時に16時50分。17時30分白雲楼ホテルに到着。夫々ひと風呂浴びて浴衣姿で大宴会場に集合、新田

本部長より「今日の出吟はいずれも上出来で県本部の存在を天下に示した」との慰労の言葉あり、根岸副本部長の音頭で乾杯し、三の膳の御馳走と美酒での飲食となった。つづいて車輪毎の趣向をこらした余興があり、感嘆やら爆笑やらで宴会は頂点に達した。終盤には上席役員の余興が披露され、20時30分頃自然流会の形で宴を終えた。

（第三日） 佐渡の夕日に喝采

佐久間爽岳

全国大会も無事に終り、第三日目は心も軽い。天気は上々の秋晴れとなる。

一行は四台のバスに分乗し、湯涌温泉から程近い江戸村に到着。江戸村は本陣や、武家屋敷、町衆の家などがあり、加賀藩の奉書を造っていたという紙漉きの家もあった。いづれも昔の生活調度が置かれてあり豪華なものも見られ、また馬小屋には馬の匂いが滲み出ていた。

バスは北陸高速道を直江津へ向ってひた走る。礪波平野は五月頃に一面のチューリップ島になると聞いたが、大きな立看板など一つもなく、美しい田園風景が続く。

計らずも気球の競技大会と思われる大きな気球が、青空にぽっかりと浮んでおり、気球は八つ位数えたが、それぞれに鮮やかな色彩で印象的だった。

やがて右手に、冠雪した立山連峰が見え始め、十月の光りの中に白銀の嶺が眩しい。左に眼を転じると、紺碧の日本海であり、親不知のあたりでは視界が百八十度以上に展開したので、長い水平線を見ることができた。直江津には早くも十二時二十分着。直江津港からジェットフォイルに乗船し

佐渡が島へ向う。シートベルトを締めて、最高時速八十六Kmで海上を飛ぶように進む。島までの距離七十八Kmを六十五分で着いたのは、早いので驚いた。

佐渡では一行の中で「たらい舟」に乗る人、見る人。ほんの少し、ぐるっと廻って四百円。紺緋の着物の女船頭さんが漕いでくれる。

佐渡は思ったより大きい島で、淡路島の一・五倍あるとのこと。流人の島として名高いが、承久の乱の順徳上皇を始め、皇族公卿、僧侶、世阿弥などが旅されたので、京都の文化が伝わったと説明される。

小木港からバスで、変化に富む海岸線を宿泊地の相川へ向う。奇岩が多く打寄せる波は荒い。眞野湾の「かき筏」を見ながら夕焼けの長手岬で途中下車。真赤な太陽が直接、水平線に沈む様子を皆で息をつめるようにして見つめる。刻々の陽が没し去った時、思わず歓声と喝采が起った。ガイドさんも喜んで「夕日の沈むのを見て、拍手をされたのはお客様が初めてです」と。それから釣瓶落しに佐渡は暮れていった。今日の旅も無事に終わった安堵感と、感謝の思いでいっぱいになる。

夜は食事の時、地元のおけさ保存会の人々が「相川音頭」や「佐渡おけさ」をきび

きびと踊ってくれた。手まねで踊りの手を楽しむ人もあり、賑やかな宴となった。

(第四日) 佐渡めぐり

村田静岳

今日は晴天。佐渡ロイヤルホテル万長を出発し、バスは尖閣湾へ。日本海の荒波に洗われた岩の景色は格別で、男性的で迫力がありました。

佐渡金山では生きた人の様な人形が、その当時の様子をあらわし、当時の苦しみをひしひしと感じました。徳川三百年の繁栄の影で、ここで働いた人達の思いはいかばかりかとあわれをさそいました。罪もなく流人にされた人も多く、恨みの涙を流しながら、来る日も来る日も此の坑道の中で働き続け、若くして死んでいった人らしい、手を合わせ冥福を祈りました。

大佐渡スカイラインは紅葉には少し早く、テラホラと紅く染まっていました。朱鷺の里にて昼食ののち、妙宣寺の五重塔を見学、両津港よりカーフェリーで新潟港へ。カーフェリーの中では、各グループで丸く座り、お酒も入ってか、軍歌あり、民謡あり、童謡ありで賑やかに過すうち、二時間が知らぬ間に経って、此の度の旅の最後となりました。

新潟より新幹線で帰途につき、神奈川ー愛知ー滋賀ー石川ー福井ー富山ー新潟ー佐渡ヶ島ー新潟ー東京へと、遠距離を廻り、四日目ともなると、大分疲れも出たようですが、一同元気で、事故もなく、楽しい旅の出来ました事、お世話をかけた先生方に厚く御礼を申し上げます。又来年を楽しみにしております。ありがとうございました。

(入会)

547 宮下つや子 逗子市山ノ根三一八一三四

(真澄) 電〇四六八一七一七四四五

548 石塚美耶子 葉山町下山口一三七五

(一色A) 電〇四六八一七五一一三三〇一

549 荒井 勇 葉山町長柄九六七

(長柄) 電〇四六八一七五一一五六四五

(退会)

69 近藤尚風(葉月) 229 行谷松風(風早)

510 行谷光山(一色A)

空高く、空気は透明に牙え、山々の木々もうつすらと枯葉色に染まってきて、文化祭たけなわの季節です。今月号は楽しい吟行記をのせました。来年は皆さまもぜひ御参加を。紙面の都合で練吟メモは来月号にのせまうので乞う御期待を。そろそろ重ね着の季節です。風邪にはくれぐれも御注意を。